

鏡花文学における温泉表象：『眉かくしの霊』と『鵜狩』を中心に

ビアンコ アンドレア

本発表の目的は、泉鏡花の作品における温泉表象を考察することである。

言うまでもなく、温泉宿での滞在を契機として、文学作品を執筆した日本人の作家が多いのだが、殊に興味深いのは多くの場合、温泉表象は物語の仕掛けであって、ただの修飾ではないということであろう。中でも、鏡花文学においては、温泉表象は作家の原型的なモチーフを呼び起こすという大事な目的を果たしていると考えられる。

「場面」というのは文学作品を理解するための必要な文化的背景を読者に与えてくれるのは確かであろうが (Jeremiah, *The Use of Place in Writing and Literature*, 2000)、鏡花自身も『描写の真価』などの明治 41 年と 42 年に執筆した随筆に登場人物の描写と物語の構造よりも場면을大事にしていることを主張している。それだけに、鏡花の作品の多くが温泉を舞台にしていることは意味があると言えよう。

鏡花文学においては、水が欠かせない要素であり、魔性と母性の融合した女性と死の世界と密接に関わっているのは常識である。しかし、温泉を舞台にした作品を分析する際には、禊のような温泉に関連した水浴行為の意味も考慮に入れば、女性の清らかさと傷を癒す力をより明らかにすることができよう。その上、温泉宿が一種の「向う側」であり (鶴田欣也『日本近代文学における「向う側」：母なるもの性なるもの』、1986)、日常現実から逃避できる特別な場面だということにも注意を向ければ、鏡花文学における幻想の世界も一層非現実的に見えてくるので、温泉表象は意図的な物語の仕掛けだといっても過言ではなからう。

本発表では、どのように『眉かくしの霊』や『鵜狩』といった鏡花の短編小説の構造に温泉を組み込んでいるかを明らかにしながら、温泉に関わる鏡花文学の理解を深めることにしたい。

鏡花文学における温泉表象…『眉かくしの霊』と『鵲狩』を中心に

慶應義塾大学 ビアンコ アンドレア

一、はじめに

泉鏡花は様々な随筆などで自分の執筆活動に関して述べており、『描写の真価』（明治四十二年七月）では場面を中心に触れている。具体的には、小説の雰囲気や登場人物の感情などを自然に合わせざるを得ないので、登場人物の描写と物語の構造を考える前に、場面を決めておく場合が多いと記している。『小説に用ふる天然』（明治四十二年一月）でも類似的の説明をしているのだが、景色を見てから自然に登場人物を思い浮かべたことが多いとも述べている。

種村季弘は、鏡花ほど温泉が舞台の小説を執筆した近代作家はいないと述べており、鏡花が場面に特有なこだわりを持っていたとすれば、その作品の多くが温泉文学だということは意味があると言えよう。本研究では、入浴シーンの有無を問わず、ただ温泉のイメージを呼び起こす温泉場を舞台にした小説を温泉文学と定義する。

以下では、どのように『眉かくしの霊』（大正十三年五月、『苦楽』第一巻第五号）と『鵲狩』（大正十二年一月、『サンデー毎日』第二年第一号）の構造に温泉が組み込まれているかを明らかにしながら、鏡花文学における温泉表象が作家の原型的なモチーフを呼び起こす大事な目的を果たしていることを示したい。

二、『眉かくしの霊』における温泉

『眉かくしの霊』は奈良井が舞台の怪談である。境賛吉という主人公が怪異の集まる温泉宿に逗留しているのだが、ある意味で温泉宿の迷宮めいた建築構造そのものが幻想を出現させる仕組みになっているといっても良い。とりわけ、東郷克美も指摘するように、能舞台の鏡の間に相当する橋がかりと同様に、湯殿へ導く橋がかりはこの世を去った人々と遭遇できるような空間として描かれ、現世と他界とを繋げる役割を果たしている。作中では「橋がかり」という言葉が六回も繰り返され、さらに「湯どのの橋」という表現も出てくる。そして、その都度不気味な予兆が感じられる。

境は洗面所の方から水の音が聞こえ、「橋がかりからそこを覗くと、三ツの水道口、残らず三条の水が一齊にざつと灌いで、徒らに流れて居た」。午後の三時ごろ同じような水

種村季弘『水の迷宮』国書刊行会、二〇二〇年一二月、八四頁。
東郷克美『異界の方へ…鏡花の水脈』有精堂出版、一九九四年二月、一四三頁。

の音が響き渡り、これ以降も音はしきりに聞こえ、次第にお艶の幽霊が現れる予兆になっていく。その夜も洗面所の方から水の音が聞こえ、境が湯殿の方へ向かうと橋がかりの下り口に三人が立っている。このように作中ではしばしば「三」という数字も不吉な予感として繰り返される。橋がかりを渡って脱衣所に着いた境は湯殿にお艶の幽霊が浸かっている気配を感じる。そして、橋がかりを渡っている料理番の伊作の袖の脇に脱衣所にあった二つ巴の紋の気味悪い提灯もついていくのを見る。この場面では境も読者もまだ知り得ないのだが、小説の終わりで伊作はこの提灯がお艶の死と関係があると説明する。そして、境は電気が突如消えるのに驚かされ、案の定お艶の幽霊に遭遇する。小説の終わりにはお艶の幽霊が「湯どのの橋」で現れる。

この温泉宿の庭には池があるのだが、水面が下がる時にその中にいる鯉が弱るので、「台所の大桶へ汲込んだ井戸の水を、遥々とこの洗面所へ送って、橋がかりの下を潜らして、池へ流込む」のだ。このように橋がかりを渡って池へ流れ込む水も現世から他界の方へ移動するものとして捉えられる。

作中には村社の奥深い森で、桔梗ヶ原という原の中にある桔梗の池も登場する。伊作はその水際に居住する美しい奥様に惹かれ、温泉宿の池を眺める時もその面影を思わずにはいられない。桔梗の池の奥様は超自然的な存在であり、次第にお艶の幽霊のイメージとも重なっていくのだが、温泉宿の池の鯉を捕ろうとする白鷺もお艶の顕現として捉えられる。このように、温泉宿の池はお艶の幽霊と密接な関わりがあり、それだけに池へ流れ込む水が橋がかりを渡ることは意味があると言えよう。

折口信夫によると、かつて初春の禊の儀式の際に使用される若水は人々を浄化して原始状態へと戻すことができる聖水だと信じられていた。お艶の幽霊が湯の中で現れ、水と密接に関わっていることを踏まえれば、橋がかりを渡りながら池へ流れ込む水も聖水の一種だと捉えられる。鏡花文学において、水は日常世界と神秘的な雰囲気包まれた世界とを隔て、主人公を現世から他界の方へ移動させる要素である。折口の指摘からいえば、人々は死に相当する水界に入り込むと原始状態へ戻ることができる。しかし、鏡花文学の主人公は原始状態へ戻ることを願っているにもかかわらず、なんとなく温泉に入らない。それは『眉かくしの霊』にも当てはまり、境は湯槽に入らずに自分の座敷へ引き返してしまう。

また、お艶の幽霊は最初、湯殿の中で現れる。鏡花文学では幻想の世界に入り込むのに、昼から夜へとといった推移あるいはぼんやりとした雰囲気が描かれる。お艶の幽霊が最初に現れる時も電気が突如消えてしまい、脱衣所で巴の提灯ばかりが灯っている。その上、温泉の湯気が立っているために雰囲気はぼんやりしている。この薄明かりによって境は不安を感じ、帯を解きかけようとする。すると湯殿にお艶の幽霊が浸かっている気配を感じる。

幻想を出現させる湯殿はお艶の幽霊の魅力を感じさせるという目的も果たしている。鏡花文学ではしばしば恐ろしい性的な魅力を持つ女性が描かれる。『眉かくしの霊』の入浴の場面では、お艶のエロチックな裸体が聴覚と臭覚を通じて示唆されている。境は不気味な気配がして湯殿の扉に片頬を付けてみると、「ばちゃり」と湯が動き、「何の隙間からか、ふんと梅の香を、ぬくもりで溶かしたような白粉の香」がするので、湯槽に女性が浸かっていると思う。夕食後にも入湯してみようすると、「ちゃぶりと微に湯が動く。と又得ならず艶な、しかし冷い、そして、におやかな、霧に白粉を包んだような、人膚の気がスツと肩に絡って、頸を撫でた」。お艶の幽霊は境の座敷に現れる際にも美しく見えるのだが、そこでは恐ろしい超自然的な存在になっている。これに対して、湯殿の中で現れる際の湯気から垣間見ることができる粹な姿は恐ろしさよりも性的な魅力を感じさせる存在になっている。

三、『鵲狩』における温泉

『鵲狩』は片山津の半月館弓野屋という温泉宿が舞台の短編小説である。この話では稲田雪次郎という主人公が初冬の夜更けに目を覚まし、洗面所へ向かう。この作品でも水に関係するモチーフがどんどん重なり合い、階段を降りていく雪次郎はあたかも幻想の世界に入り込んだようになる。雪次郎は洗面所へ続く廊下で雪のように真っ白い女性に出会い、「白鷺に擦違ったように」驚いてしまう。『眉かくしの霊』の橋がかりと同様に、廊下も現世と他界とを繋げる場所として描かれることがある。ただ、『鵲狩』で雪次郎が遭遇するのは幽霊ではなく、お澄という湯上がりの女中である。しかし、薄明かりで肩も腰も見えず、頸だけがポツンと白く浮かんでいるので、雪次郎はあたかも幽霊を見たかのようにびっくりする。鏡花文学においては、雪という要素がしばしば幽霊の現れる兆しとして登場し、雪のようなお澄も気味の悪い存在として描かれている。しかし、『眉かくしの霊』のお艶の幽霊と同様に、お澄の湯上り姿も恐ろしいながら粹な魅力も感じさせるものだ。

九鬼周造によると、「いき」な姿には裸体を回想する湯上り姿もあり、風呂から上がったばかりのお澄もやはり粹に見える。具体的に言うとお澄の裸体は臭覚を中心に回想される。作中の空気には人肌を感じさせる匂いが漂いており、雪次郎は湯上がりの湯の香を懐かしく感じる。それは懐かしい母親の匂いのようなものだ。また、匂いのみならず、お澄の柔らかい声も母親のように優しく感じられる。そして、薄い霧のようなものを踏んできた雪次郎は、それがお澄の浸かっていた湯槽の湯気だろうと思ひ、名残惜しく感じる。雪次郎はお澄の手に持っている手拭を取り、手どころか顔も拭くと、それを「湯のぬくもりがまだ残る、木綿も女の膚馴れて、柔かに滑か」に感じる。

ガストン・バシュラールは、水という要素は生死に密接な関わりがあり、風呂に入る時の横たわる姿勢が墓に葬られた死体や羊水の中に浮かぶ胎児も思い出させると述べている。さらに、どんな水でも自然に母乳を連想させると主張しており、牛乳っぽい肌触りの温泉は一層そのイメージを呼び起こしやすいと言える。これに対して、鏡花文学の主人公は母胎にいる時への逆行を願ひ、母親とその象徴としての温泉を慕っているにもかかわらず、温泉には入らない。しかし、方角がわからなくなる温泉宿を「向う側」の一種だと考えると、主人公の旅は母親の胎内への回帰として見えてくる。このような観点から、迷宮めいた温泉宿は幻想が出現するという仕組みのみならず、自我の溶解と退行を刺激するという大事な目的も果たしている。

四、まとめ

本発表では『眉かくしの霊』と『鵲狩』における温泉が物語の構造にしっかりと組み込まれ、ただの修飾ではなく、戦略的な物語の仕掛けだということを示した。そのうえで『眉かくしの霊』と『鵲狩』における温泉が鏡花の原型的なモチーフを呼び起こすという目的を果たしていることを明らかにした。

九鬼周造『九鬼周造全集』第一巻、岩波書店、一九八一年七月、四三頁。

ガストン・バシュラール『水と夢…物質の想像力についての試論』国文社、一九六九年八月。

鶴田欣也『日本近代文学における「向う側」…母なるもの性なるもの』明治書院、一九八六年八月。